



- 1 仮設住宅を中心にまわった移動販売
- 2 栽培講習会。開催会場数を増やすことで、参加人数も増加し、生産者同士の交流にもなった
- 3 組み合わせ栽培の例も記載している野菜栽培暦
- 4 新たな品目に取り組み生産者ハウス
- 5・6 いつも笑顔の阿部和子さんと出荷したトマト
- 7 冬採りキャベツを収穫する阿部美智子さん
- 8・9 陳列棚に並ぶ冬採りキャベツと共同播種の様子
- 10 店内の品揃えはこれまでの努力が形として表れている
- 11・12 熱き思いを語ってくれた東梅康悦部会長。商品を確認しながら今後の展望をJA東部地区営農センター長と語り合う



上、生産者の団結を後押しした。8戸57aを皮切りに面積拡大が進み、平成27年は18戸約1haに広がった。

約10aで栽培する同町の阿部美智子さんは「冬採りキャベツは冬場の貴重な収入源。だあすこ産直が開店して出荷先も増える。多品目栽培のひと品種かもしれないけれど大きな可能性を秘めていると思う。一層の仲間づくりにも繋がってほしい」と期待を込めて話した。

人との繋がり

「挑戦しなければ何も始まらない」そう語るのは、同町で果樹やハウス野菜などを栽培する阿部和子さん。イチゴ栽培を始めたのは平成23年の震災直後だった。ゼロからの

震災から

東日本大震災の津波被害を受け、沿岸地域の組合員は販売場所を失った。JAでは組合員の営農活動と販売場所の確立を目指し、国や町に営農を基軸とした復興拠点の再構築を要望。大槌町沿岸営農拠点センターの建設と産直店舗を設けることが決まった。

センターの建設計画と並行しながら、沿岸地域の組合員とJAは仮設住宅への移動販売や予冷庫を再利用した店舗での販売、片道2時間半かけ、花巻市の母ちゃんハウスだあすこへの出荷など、売り場確保に努める日々が続いた。

部会設立

生産活動の再開に尽力を続ける沿岸地域の組合員で構成する「沿岸産直部会」を平成26年2月に設立。現在106人の会員が所属している。

だあすこ産直店オープンまでの約2年間、会員達は通年出荷用の作物栽培に取り組みできた。約70種の播種・収穫期間が一目で分かる「野菜栽培暦」の活用や新たな品目の育成を行った「新品目栽培実証」を使用したさまざまな栽培への挑戦。特に冬期間のハウス野菜に力を注いだ。多品目の組み合わせ栽培は生産者の意識向上に繋がり、やがて講習会や研修会の参加者人数が増加。互いに技術や情報の交換を積極的に行った。同じ目標に向かって進むうちに仲間意識や一体感が生まれていった。

営農活動の再構築に向けて

前へ進み続ける JA沿岸産直部会

「だあすこ沿岸店」の存在は生産意欲の向上にも繋がっている。また学校給食やレストラン、ホテルなどからも需要があり、更なる販路拡大や地産地消の拠点になるだろう。

しかしここまでくるとは容易ではなかった。東梅康悦同部会長は「設立時、会員が集まるかが不安要素のひとつだった」と振り返る。声掛けで会員は集まったが、農作物のにぎわいを1年中継続できるとは次なる課題だった。しかし、栽培講習会への参加率や新たな栽培品目に取り組み姿勢、そしてオープンのにぎわいに不安はかき消された。

「だあすこ沿岸店はひとつの起爆剤で、ここからがスタート。震災前以上に地域農業を活性化させていきたい。何より地域に喜ばれ必要とされる存在を目指す。私達にしか出来ない品揃えや店舗づくりをしていきたい」と東梅部会長は力強く語る。

生産者たちの日々の努力と農業生産活動は、地域に活力を与え、未来を明るく照らす希望の光となるだろう。

冬採りキャベツ

夏は冷涼、冬は温暖な沿岸地域特有の気候を生かした周年出荷への取り組みに冬採りキャベツがある。

震災前から試験栽培をしていたが農業復興をてこ入れするため震災後に本格的に栽培を開始。7月の播種後、8月に定植、12月末〜1月に根を付けたまま半冷凍状態で収穫し、貯蔵。3月まで出荷が可能だ。春出荷用の野菜と組み合わせることで通年出荷の可能性が広がり、所得向上にも繋がる。



スタートは困難の連続。でも何があっても諦めず、指導機関や栽培農家を幾度も訪問し、自らの足で技術を身に付けイチゴ作りを追究し続けた。今では、春になると濃厚で甘いイチゴが実をつける。平成25年にはハウスでミニトマト栽培を開始。友人の協力でジュース加工にも着手した。今年も育苗にも挑戦する。

どんな時も前へ進み続ける阿部さんの原動力は「人との繋がり」だ。壁にぶつかる度に、声をかけ力を貸してくれた生産者仲間や近所の人々が支えになった。「自分の農業をきつかけに、震災前のような地域の繋がりを取り戻したい。大好きな生まれ故郷への恩返し。下を向いても意味がない。元気に楽しい農業をしたい。農業に興味を持つ人も出てきて、地域農業に新しい仲間が出来ると思う」と明るい笑顔をみせた。

描く未来

営農活動の再構築に向けて、一歩一歩、着実に前に向かって歩み続ける生産者たち。

だあすこ沿岸店の存在は生産意欲の向上にも繋がっている。また学校給食やレストラン、ホテルなどからも需要があり、更なる販路拡大や地産地消の拠点になるだろう。

しかしここまでくるとは容易ではなかった。東梅康悦同部会長は「設立時、会員が集まるかが不安要素のひとつだった」と振り返る。声掛けで会員は集まったが、農作物のにぎわいを1年中継続できるとは次なる課題だった。しかし、栽培講習会への参加率や新たな栽培品目に取り組み姿勢、そしてオープンのにぎわいに不安はかき消された。

「だあすこ沿岸店はひとつの起爆剤で、ここからがスタート。震災前以上に地域農業を活性化させていきたい。何より地域に喜ばれ必要とされる存在を目指す。私達にしか出来ない品揃えや店舗づくりをしていきたい」と東梅部会長は力強く語る。

生産者たちの日々の努力と農業生産活動は、地域に活力を与え、未来を明るく照らす希望の光となるだろう。

